

釣れ釣れなるままに

2004年思い出の釣行記 PART. 6

へし折られけ馬鹿り 鹿島釣狂

岩見沢釣遊会第5回大会

☆開催日	平成16年9月26日
☆開催場所	東静内港～三石温泉
☆入釣場所	春立4区
☆潮	満潮 00:23 131cm
	干潮 07:52 32cm
☆釣果	カジカ 422mm 4
	アカハラ 294mm 1
	重量 380g
☆成績	合計点数 1096点
	成績 身長優勝
	持ち点 3点
	累計点 8点 (250②①③)

春立漁港

9月の大会はまだ本命の魚が岸寄りしていないこともあり、嫁のアカハラを暗い内に確保していないと不安になる。幸いアカハラ釣りの名人である庄司氏が春立漁港で下りるといのでご同伴を願う。午後11時には釣りバスが到着し、庄司氏に案内されて漁港左脇に付いた船泊に向かった。ノッペリとした鏡のような海面が漁協の倉庫群から漏れる照明でオレンジ色に染まっている。アカハラはいるのだろうか？いたとしてもこの潮止まりの静けさでは食い渋ることであろう。少しでも波の立っている渚に移動しようかと思ひ倦ねていると、それを見透かしたように庄司氏が「先週の大会ではここでアカハラもカジカも

出たのだ」と私を促すように言う。

兎にも角にもアカハラ仕掛けをドボン、ドボンとやる。庄司氏が早速、魚をあげたようなので、近づいて見ると40cm近いアカハラが観念したように氏の手の中に収まっていた。氏はその後も順調に釣果を伸ばし続けていたが、私の竿は静穏そのものである。アカハラとは違うベタン、ベタンとコンクリートを叩く響きが伝わってきたので近づいてみると今度は35cm程のクロガシラであった。上バリのイソメに食いついたという。仕掛けは？と見ると細長いハリスにゴロバリとして13号の孫バリが付いていた。

氏はアカハラの微妙なアタリを適確に合わせ、静かに寄せては慎重にコンクリートのタタキに上げている。私にはピクツとも来ない。劣等感に苛まれる。居たたまれなくなって私にもアカハラが釣れるような場所はないかと川が流れ込んでいる所や漁港の左の砂浜を探索した。自分の技術の未熟さを場所でカバーしようという魂胆である。

私は、12年度と15年度に年間優勝をさせていただいた。12年度は仲間に教えて頂いた釣り場にたまたま魚が沢山いてくれたというまぐれ当たりの連続であった。しかし、15年度は自ら釣り場を探して歩き、狙った魚を自製の仕掛けで釣り上げ、それなりに努力した結果だと思っている。己の釣りが進化してきたのだとさえ思え、更に、2度目のまぐれ年間優勝はないと自負していたところでもある。しかし、この悲惨な状況は何なのだ。高慢ちきになってきていた己の鼻を神は見逃さなかったのだろう。上向きになってきた鼻を押さえ、驕りを諫めてくれたのだ。

3つの驕り

人間には「健康の驕り」「生命の驕り」「若さの驕り」という3つの驕りがあり、病気や事故に遭うまで、健康や生命のありがたさには気付かない。至言である。五十路を過ぎた私には青年期のなにものをも怖れないような「若さの驕り」はない。そして、幸いなことに今まで命あることの喜びや健康であることのありがたさを真に実感することはなかった。いまだに「健康の驕り」や「生命の驕り」を内在させているのだろう。それを失って初めてそのありがたさを思い知らされるのであろう。しかし、今はまだその「驕り」を誰憚ることもなく持ち続けていたいと思うのだ。釣りという趣味の領域ではあるが、大海原の懐に抱かれるとき、その「驕り」の鼓動を素直に感じていたいのだ。

気持ちを切り替えるために場所をわずかに移動し、アカハラ1匹だけでもと腰を落とし静かに竿先を見つめる。竿先がわずかにチョン、チョンと揺れてようやく小さなウグイが釣れた。そして、さらにチョン、チョンと来る。先程よりも小さなウグイであったがこれは丁寧に海に返しておく。さすがに庄司氏のアカハラも小さくなってきたようなので移動を決意する。庄司氏も移動の準備をし始めたが余裕の移動なのであろう。

春立4区舟揚場

昨年最終大会でアブラコをあげて年間優勝することが出来た春立4区の舟揚場に向か

って一気に歩く。今回は車輪の大きなキャスターを新調したので多少の段差には問題なく移動も楽である。舟揚場に着いてみると、昨年アブラコをあげた舟揚場を見失ってしまった。似たような舟揚場が続き次回入るときはこの舟揚場にと背後の様子を記憶していたつもりなのにそれが思い出せない。寄る年波には勝てないものだ。舟揚場横にテトラの入っていない空間があったのを思い出して、とにかくその辺りに見当をつけて荷物を下ろす。見慣れないポールが立てられているがよしとしよう。

本日はべた風なので満潮時とはいえ随分浅く感じられ、その沖に向かってドボンとやる。そして、さらにあちこちと辺りを徘徊してから釣り場に戻ると35cm程のカジカがついていた。舟揚場の左前方20m先に渡ることの出来る高い岩があったので、空身で乗ってみる。すると、平穏だった海面が急に騒ぎ出し、その岩にぶつかった波が高く舞い上がり、頭上から降り注いできた。濡れ鼠になって釣り場に戻るとカジカ30cmがついていた。

3時頃からあちこちの漁師小屋に電灯が付き始め、ビニールシートを被せてあった昆布を砂利原に並べている。前日はあまり天候がよくなかったので、干しきれなかった昆布を一旦ビニールシートで守り、今日の晴天を予想して今から並べているのだろう。



岩盤前

明るくなり潮も引いてきたので前の岩盤に異動する。そこで、カジカ35cmが出た。更に右方向に少しずつ移動しながら40cmを頭に1カ所で1本の割でカジカが出た。

浅海が続く海岸だが一面昆布がうねり、いかにもアブラコの出そうな場所に来た。ホンダワラの中に、昆布の中に、沖の高岩の際に、更にその高岩の向こうにと広角に打ち続けたが、一向にアタリは出なかった。

9時を回った。最干潮が過ぎて満潮に向かって足下の潮が騒ぎ出したので近くの昆布の際に打ち込む。マキエがなくなったのでイカゴロをネットに詰めたものだ。それにカジカ35cmが来た。35cm以上のカジカ

が4本揃ったが嫁がウグイでは心許なく、アブラコを狙って最後まで努力したがハゴトコだけの結果であった。

9月の大会にしては皆さんカジカをもっており、今年はカジカが濃いという言う噂は本当のようである。特に大前事務局長の魚は見事だった。三石漁港左の釣果であるが45cm

のアブラコ2本と40cmのカジカ3本が異彩を放っていた。

審査結果

優勝	大前健治	1331点	(アブラコ454mm+カジカ 370mm+5070g)	三石漁港左
準優勝	吉井 博	1110点	(カジカ 397mm+アカハラ365mm+3480g)	盈 進
3位	鹿島釣狂	1096点	(カジカ 422mm+アカハラ294mm+3800g)	春立4区
4位	嵐 光博	1031点	(カジカ 351mm+アカハラ333mm+3470g)	盈 進
5位	山岸 伸	969点	(アカハラ366mm+カジカ 356mm+2470g)	浦 里
身長優勝	大前健治	45.4cm	(アブラコ)	三石漁港左

これで、年間の成績の方は4回合計で8点(② ② ① ③)となった。第2回大会に併せて今後の第6・7回大会でも職場の行事と重なり参加することが出来ず、5回の成績で争われる年間成績にはあと1歩及ばなかった。

第6回大会の成績表が送られてきたが、キリキリとした歯がゆい思いをしながらそれを眺めることとなった。海が荒れた後の大会であったためカジカの岸寄りが期待された大会であった。

優勝者は嵐光博会長であり近浦を釣り歩き、カジカ46cm以下13本、嫁にアブラコ43cmを釣り1499点の高得点であった。準優勝は1498点の大前健治事務局長であり、僅か1点差で及ばなかった。身長優勝は46.5cmのアブラコを釣った佐々木秀美氏で、カジカも揃え1448点である。1200点以上が8人も出るなど、みなさん4kgの計量器で2回に分けての測定だったことからその激釣ぶりが伝わってくる。

年間優勝者は吉井氏であり、最終の第7回大会で優勝し、並み居る強豪をごぼう抜きしての逆転優勝となった。

悠々自適

勤めを離れて悠々自適の生活を送っている先輩を見ると、憧れにも似た羨望を抱くときがある。私の仲間にも日々釣り三昧と洒落込んでいるものがある。

転勤後の休日にふらっと砂川市の石狩川遊水池オアシスパークに寄ってみた。うららかな春の陽差しを背中一杯に浴びながらヘラ竿を振っている釣り人が数人いる。遠くから眺めていたのだが、私の視線を感じたのであろうその内の一人が振り返った。なんと、以前一緒に小平海岸の砂浜でカレイ釣りに興じた仲間である。彼の若いときは荒磯に溪流にと飛び回っていたのだが、退職後はヘラの奥深さに嵌(はま)ってしまって、自宅から近いこの池に毎日通う有り様だと言う。

サラリーマンとして生きるのはグライダーのようなものである。自分では精一杯飛んでいるつもりでも、実は飛ばされていることに気づくことになる。自分で抱えるエンジンがない悲哀さゆえ、やがて地上におりなくてはならないのを目の当たりにした時にふと立ち止まるのである。数年後に退職を控えた私にも、その後の無為の日々をどの様に過ごせば

よいのだろうかと考えるときがある。

日がな一日、飛べなくなった己を嘆きエンジンを欲しがるのは哀れである。飛べなくなっても脚はあるのだから、自前で歩みを進めるべきであろう。そして、遙か遠くの自分の目指す頂きに向かって一步一步登り、その頂上で素晴らしい眺望を楽しむのだ。

釣遊会の先輩方を見ていると、悠々自適を釣りという趣味に興じ、大いに人生を謳歌している。今はグライダーにしかなれない私だが、人生のフィナーレを華々しいクライマックスとすべく、翼をいっぱい広げて風に乗れ、悠々自適の着地点を探していきたい。

【つれづれ】

○年間成績 出席大会平均

$$1125 + 1075 + 1120 + 1096 = 4416$$

$$4416 \div 4 = 1104$$

○第6回大会結果（10位まで）

優勝	嵐 光博	1499点	(カジカ 460mm+アブラコ431mm+6090g)	上近浦
準優勝	大前 健治	1498点	(カジカ 453mm+アブラコ397mm+6480g)	浦河
3位	佐々木秀美	1448点	(アブラコ465mm+カジカ 435mm+5480g)	山中
4位	前野 達志	1345点	(アブラコ411mm+カジカ 411mm+5230g)	冬島
5位	吉田 潤一	1341点	(アブラコ440mm+カジカ 397mm+5040g)	下近浦
6位	安曾 和夫	1291点		
7位	岩本 満	1247点		
8位	阿部 重義	1206点		
9位	堀内 正博	1177点		
10位	谷口 良幸	1062点		

○第7回大会成績

優勝	吉井 博	1341点
準優勝	谷口 良幸	1238点
3位	山岸 伸	959点
4位	嵐 光博	945点
5位	前野 達志	922点

○年間成績

優勝	吉井 博	16点	(⑦ ⑤ ① 10 ② 50 ①)
準優勝	前野 達志	17点	(5 ③ ③ ③ 9 ③ ⑤)

”	嵐 光博	17点	(④ ④ 50 6 ④ ① ④)
”	大前 健治	17点	(③ 8 ⑤ 14 ① ② ⑥)
”	堀内 正博	17点	(① ② ④ ⑤ 10 ⑤ 10)

※ 準優勝は同じ点数であるが、6番目の成績のよい方から順位が決まる。
 それでもって、準優勝は前野、3位嵐、4位大前、5位堀内となる。